

平成十八年六月二十五日(日)

来るは出るは鎌也千賀の浦

園村

朝顔やあかねさしたるつくば山

越谷周辺 俳諧師たち

小林一茶と埼玉の俳人(越谷編)

おどけても角力になるや宵月夜

園村

武州大沢 柏屋弥平太

毛呂山町歴史民俗資料館

三度迄使をうけて時雨後

園村

初春のものと申さん日に鶏
吹降に枯てつ立尾花散

水佳

町史編さん専門調査員

毛呂山町文化財保護審議委員

葉飯にはよきうつろひや春の山

園村

梅がかの遠里巡る酢買かな

大サガミ 南山

俳文学会会員

内野 勝裕

秋といふ声よりつのる鳥かな

園村

接木して鳥ほしがる翁かな

積 雨山

一、小林一茶と埼玉の俳人

小林一茶の自筆稿本(併書複製)である『随斎筆記』(一)

文政二十一年六月一日通

越谷 中村彦左衛門

小林一茶の自筆稿本『随斎筆記』(部分)

茶自筆化政期俳人句録)には、十三人の埼玉俳人が収録されている。一茶は単なる埼玉の通過者ではなく、埼玉の俳人と深い関わりを持っていたのである。『随斎筆記』から、特に越谷周辺を中心とした部分を抜き出したものを次に掲げる

全三 二月十一日 定額居ニシテ届
朝顔や朱雀(の)鐘の遠走り
つくづくと借のはかるるおち葉散

太良彦

文政二十一年六月一日通
好り入候は流クスリ候
全九月八日五月五日ヨリ入
日光道中入口瓦曾根 中村彦左衛門

(一字下げの句は、一茶が随斎成英の句録より抄出したと、考えられるもの、それ以外は一茶自身のメモ)。

短夜や露を帯出す陣の宿
鶏頭で仕題や家は一つ口
霜がれや庭からつづくちちぶ山

太良彦

秋立や露に活す釣りの魚
花芒人の住ばぞ哀なる
江ノ上や新なくもきりく
秋の蚊の息もしてあきつる水
さうらうの雨やわやう水
大寺の... 昔の木の心
中川の夜、さめてわらや雪の...

福妻や黄昏かけて有磯海

武州 園村

小座敷にわらじの人やけふの菊

園村

全(文政三)九月八日十一月廿二日三好ヨリ入
日光道中入口瓦曾根 中村彦左衛門

太良彦

おち葉して蟻にかぶせよ亦打山

園村

日光道中入口瓦曾根 中村彦左衛門

水仙や手にとるからに玉簪

千住達 園村

秋立や露に活す釣りの魚
花芒人の住ばぞ哀なる

中川の夜、さめてわらや雪の...

二、加茂園村

句録中、源谷の貞秀に次いで九句と記載の多い園村は、春秋庵加合白雄の七弟子の一人、秋香庵果兆の高弟として知られている。一茶と果兆は旧知の間柄であったから、一茶は園村のこともよく知っていたと思われる。そのことを証明するように、園村は「一茶の『七番日記』」にも、その名が見えるのである。「十九日 於上町邸書通李峰素玩一園園村」とあるのがそれである。「十九」は、文化十二年（一八一五）七月十九日で、「上町」は信州長沼の上町である。つまり一茶は、信州から園村へ宛てて手紙を書いているのである。

この園村が、蒲生村（現越谷市蒲生）の人であることは、まだそれほど知られていない。

園村について初めて取り上げた文献は、大正十二年（一九二二）十二月一日刊『新選俳壇年表』（平林風二・大西一外著）であろう。

○園村、加茂氏、秋香庵と號す、果兆門、武蔵人。
極めて貴重な内容であるが、同一人物を別人としている。その後、昭和三十二年（一九五七）七月十日刊行の『俳壇大辞典』（明治書院）では、さすがにこの誤りに気づき、つぎのようにある。

園村 くになら 俳人。江戸の人。加茂氏、また高橋氏。果兆門。秋香庵二世と號す。文化十四年（一八一七）に先師果兆の句集『曾波可理』を梓行した。享年不明。
しかし、『新選俳壇年表』が指摘した「武蔵人」「称源家」の二点は、省略を許されない重要事項である。また、近年（平成七年十月二十七日）刊行の『俳文学大辞典』では、豊

来求雄氏が、次のように紹介している。
園村 くになら 俳諧作者。生没年未詳。文政（一八一八—一八一三）末ごろまで存命か。本名、高橋甚蔵。別号藤原

居。成童園精生の人。果兆門。初め果兆没後、秋香庵を継承。文化一四年（一八一七）、果兆の句集『曾波可理』を編纂刊行。句「風花も降らうけしきの柳かな」（『せき屋せう』）
『新選俳壇年表』『俳壇大辞典』が江戸の人としたのは、『隨筆筆記』に「千住連 園村」とあるように一時期千住に住んだことがあったためである。千住（関原の里）は、果兆（藤沢平右衛門）の養父であったから、園村は果兆のもとで一門（千住連）を兼ねていたのであろう。

また、同書が別名を加茂氏としたのは、蒲生は加茂とも言ったからである。元禄期、水野謙一郎の紀行「結城使行」には、「道ぞ水き日にやき水を加茂蒲生」の句もある（『越谷の歴史物語』第一巻）。つまり園村は、出身地の地名を俳号の氏としたのである。越谷（会田氏）吾山、児玉（久米氏）逸浪と同じである。

次に加茂（高橋氏）園村の真名について考えてみたい。拙著『埼玉俳壇人名辞典』も「一茶全書」や『俳文学大辞典』に従って「高橋甚蔵」としたが、どうも『新選俳壇年表』説の「高橋源家」がいいようである。文政九年（一八二六）三月序刊の半場里丸讀「杉間集」の「杉間集記本扣」（半場里丸俳壇資料集・関東俳壇叢書巻外①）にも「蒲生川岸 高橋文蔵 園村」とある。また、『建國俳士録』（天理図書館蔵、結風文庫）も「園村 蒲生 高橋源家」なのである。

ところで、蒲生に高橋姓は非常に多いが（杉間集記本扣）の「蒲生河岸」の指摘は、極めて重要である。蒲生河岸は、藤助河岸とも言って、寛保三年（一七四三）の創設以来代々高橋藤助家が河岸問屋を世襲した越谷川の主要河岸場であった。現在も藤助の子孫高橋俊男氏が活躍を営んで、藤助河岸跡を守っておられるが、園村はこの高橋藤助の一族ではなかつたかと考えるのである。越谷川はこの藤助河岸で大きく渡曲

して、西から南へ流れを変え東加へと下って行く。
曲がりこむ坂の峻瀧や行堂
園村の柳の果兆にこんな句があるのは、あるいは蒲生河岸の園村への訪問の折りの作ではないかと、密かに想像を逞しくしているところである。
果兆



「藤助河岸跡」

越谷川通り蒲生の藤助河岸は、高橋藤助氏の経営によるもので、その創立は江戸時代の中頃とみられている。当時越谷川の舟運はここに盛んであり、はじめ藤助の邸は越谷川に面して建てられた。それは寛政八年（一六八〇）以前は越谷川沿いの用水引水のための止めの一切はなかった。従って、この河岸の跡みえは江戸へ運送されたからで、以後越谷川通りには数多くの舟運力が行われていた。特に江戸へ運ばれたのは、川中川沿いの藤助の邸に打ち切ったので、そこには川沿いの舟運の盛況で、大船の乗り場は不毛なもので、中川に橋を架け、元元川の舟運は越谷川に送っていった。この及びて藤助連中（白田光君）に傳じた藤助河岸は、この利を潤して増殖し、大正二年（一九一三）には年々五万円の巨額水防事業株式会社を設立した。世間では藤助から、越谷、結城、岩槻などの外灘方面で運ばれた、高橋氏の邸に集められた。東岸に出向された。その邸の高は、約一万八千、二層の建築費で、その邸は、年々一万八千、運賃は二万五千以上とされている。この河岸跡は、昭和初年まで利用されていた。藤助十八代、藤助高橋氏より譲渡されたものである。
平成七年 越谷市教育委員会

曾波可理
りりり

田村の入集する俳書はかなり多いので、稿を改めることとし、二三の句のみを紹介する。

果兆編『せき屋でう』(享和二年(一八〇二)正月刊・「日本俳書体系」)

風花も降う気しきの柳かな 蘆声居 田村



笠野七つをききと山(ワ)路川
 風花も降う気しきの柳かな
 享和二年(一八〇二)正月刊・「日本俳書体系」

呂律等編『草原庵百人句集』(文化十五年刊)

稲妻やむぐらの宿の中戻り 田村



稲妻や
 むぐらの宿の中戻り

神丘太史編『俳諧發句題叢』(文政六年刊・「俳諧文庫」所収)

螢火や薔子の露も照合うて 武蔵 田村

ちなみに田村の後、秋香庵三世を継承したのは、大沢宿旅

龍虎園の主人、山崎伊左衛門であったらしい。天保七年(一八三六)刊『俳諧人名録初編上』に「武州越ヶ谷大沢町、所

屋伊左衛門、号松葉、遠来館」として、秋香庵月貨が登場している。

うぐひすや雀あすこし細いかけ
 竹の子の竹より長く成にけり
 釣がねになすり付けり柳の浜

めし焚の小言やみけり鶴の声

この旅籠屋虎屋は、名主・同屋の江沢太郎兵衛屋敷の向かいにあった(「大沢宿の瓜」・拍撃に向かつて左側)が、日光道中の「商家高名録」には店先が描かれていて、その繁栄

ぶりが偲ばれる。旅籠屋を守りつつ俳人月貨(山崎伊左衛門)は、遊俳の域を超えた俳諧活動をしていったようである。幕末の俳諧への入集状況を見ると、秋香庵三世を継承した人物

にふさわしいものがある。

秋香庵月貨

武州越ヶ谷大沢町
 山崎伊左衛門
 号松葉遠来館

うぐひすや雀あすこし細いかけ
 竹の子の竹より長く成にけり
 釣がねになすり付けり柳の浜



越ヶ谷大沢町の旅館屋

また、一茶の時代に少し遅れるが、蒲生の俳人で知られたところでは、泰飯(清村重兵衛)がいる。嘉永四年(一八五二)刊『古今藝苑俳諧人名録』に入集するほか、文久二年(一八六二)刊『俳諧図像集』には、肖像を載せている。

泰飯 たいみん 清村重兵衛

蒲生村(現越谷市)の人。幕末期。文久二年(一八六二)刊『俳諧圖像集』に肖像を載せる。

音高きくの木林や鶴の声



山崎伊左衛門

(越谷俳諧略系譜)

(伊勢派)

芭蕉—涼菟—乙由—柳居—鳥酔—白雄—道彦—護物—太良彦

大梅—卓郎

(洒落風)

江戸座二世沾山—吾山—馬琴

黄四(吾山の子)

果兆—田村—同化良

三、埼玉庵太良彦

次に文政三年二月(十一日)と同年十一月(二十二日)に、一系に書簡を送った太良彦について考察する。

太良彦については、すでに『埼玉人物事典』(埼玉県立文書館編・県政情報センター発行・平成十年二月二十五日)が詳しくとりあげている。

なかむら たろひこ 中村 太郎彦

寛政6-嘉永3(1792-1850)

江戸時代中・後期の俳人。瓦葺根村(越谷市)の名主で、徳川將軍家用の御膳細糖という特殊な糯米を栽培・納入していた家の7代目。名は一稱、通称彦左衛門、俳歴はよくわからないが、埼玉庵太郎彦と号し、江戸や埼玉地域の俳人と広く交際し、彼等の句を集めた『さいたま春帖』を刊行していた。一茶とも文通があり、田喜庵種物等と親しかったようである。死の翌年刊行の追悼句集『是空集』には草朔が跋を書いた。

太良彦の諸俳書への入集状況の主なもの、次の通りである。

田喜庵種物編『俳諧新五百題』(文政二年編八序刊)

はつ冬やけふは不断の人通り

太郎彦

他十六句

田喜庵種物編『梅文庫』(文政三年刊)

はつてふや間の山ひく片すだれ

太郎彦

信州松本の閑齋席編『ありなし草』(文政四年刊『一茶全集』所収)

梅に老をすてんと啼か四十雀

逸酒編『としなみしう』二編(天保十五年重編序刊)

太郎彦

こぼるると見る間の長し女郎花

深斎撰『類題俳諧今人發句集』(天保新編)

太郎彦

遠くから見てみまきりぬ佳の花

他十五句

太郎彦

鬼吉編『深川よとみ集』(弘化三年序・『宮代町史資料集』俳諧部所収)

近よれば隨も濡ぬ花の雨

太郎彦

惟草編『俳諧人名録二編』(弘化三年霜月跋)

草の月の三朝かかきぬ福来哉

埼玉庵 大良彦

軒近うまで来て行や杜鵑

夜は海のある音して潮の花

少しづつ露も見ゆるや麦の萌

栗明編『萩笠』(嘉永二年三月序刊)

青天や嵐下りる庵のこけ

太郎彦

逸酒編『種花集』(嘉永二年編八序刊・碩布七周忌追悼)

戸もくからて葉が育穂や星祭

武蔵 大良彦

『蕪雨齋俳諧一枚刷り』(『半地墨丸俳諧資料集』関東俳諧叢書編外①所収)

一連の小鳥揺ゆく時雨かな

(没後)

大良彦

小養庵種物選・潮堂佳一夜『發句俳諧七百題』(慶応二年春序刊)

竹葉や日の影すわる草の中

他三句

大良彦

小養庵種物選・潮堂佳一夜『發句俳諧七百題』(明治十二年七月十日刊)

炭の香に再び寒し初槍

他一句

武蔵

大良彦

このように、筆者の手持の資料だけでも、おびただしい入集句を見るのである。しかも一さいたま春帖』まで発行しているところをみると、要農名主の地位を譲りながら、趣味を起えた茶匠ぶりを発揮していたと考えられる。その名は、全国的にも知られ、嘉永四年(一八五二)八月中旬刊、浪花雪文斎著、繪堂校『諸国俳人通名録』(徳術文庫、酒竹文庫他蔵)の「武蔵」部中に、「太郎彦 越ヶ谷」とあるほか、

『杉間集配本抄』(前述)にも「越ヶ谷 中村太郎右衛門殿 餅米御用 太良彦」とあるのである。太良彦の墓は、瓦葺根照蓮院の中村彦左衛門家歴代の墓地の中にある。

〈太良彦墓石〉

(正面)

諸親真如光月大姉

埼玉庵知大空居士

(裏面)

七世中村彦左衛門一稱幼名幸次郎

寛政六年八月十四日 卯卯中誕生

嘉永三年庚戌三月廿日夜戌上薨卒

壽五十七歳

一稱養俗名美津殿州沼津侯藩細垣

素平養女天保十三年壬寅八月廿日卒

壽四十四歳

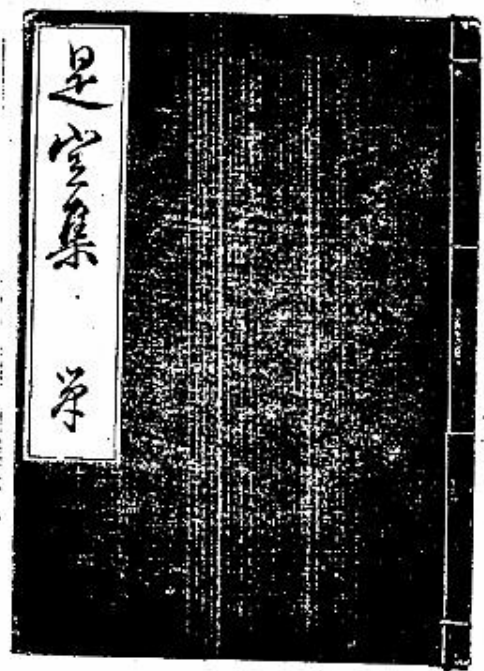


太良彦の墓

武島埼玉郡
河原中根
中村氏

埼玉庵 太良彦

竹の戸の三おとすの 稲葉如
軒近うまで来て行や杜鵑
夜は海のある音して潮の花
少しづつ露も見ゆるや麦の萌



是空集 卓

披の計り... 惟時... 妙... 暮... 皆心

『是空集』表紙と本文（部分）

有... 笑... 昔... 今... 夫... 夫... 夫...

Handwritten calligraphy in cursive style, likely a dedication or preface by Takurō.

卓郎の扇面

大良彦追善集「是空集」の序文を書いた卓郎 『俳文学大事典』(角川書店)より

卓郎 俳諧師、寛政一〇〇(一七四八)〜天明二(一八一一)四・一六、六九歳。本名、小森久助、伊豆国三島の人。江戸住。大権の門人で、孤山堂と号した。江戸深川橋下の長慶寺に葬る。編著『大権忌家集』『俳諧道の杖』(稿本)、追善集『三回忌』(夏書はじめ)(約月種)、『四』(別腹も腹の書りや今朝の秋)(兼紙短冊)。

四、氷佳と兩山

(氷佳)

氷佳は、大沢宿の旅籠柏屋弥平太の俳号である。天保七年刊『俳諧人名録初編下』に「武州日光道中、大沢柏屋、大垣氏」として出句している。別号は菱花庵と言った。

菱花庵氷佳

生垣やことしのり越すうめの花
みじか夜は胡瓜の花に明にけり

手のとどく木の先はしる紅葉かな
峰の松四五蓋下をしぐれけり

『越谷市史』(第四巻)に、氷佳(柏屋一太垣弥平太)を採る手紙かりが、かなり残っている。

武州日光道中
大沢柏屋
大垣氏

菱花庵 氷佳

すねや... の... び... の... 峰... の...

「大沢宿の爪」

一 右半軒、大垣弥平太祖父伝四郎、享保中萩島より引越旅籠屋渡世、延享中松権右衛門勝安左衛門兼子に嫁り、安永年中より年寄相勤儀、其孫弥平太、安永より享和迄相勤、寛政乃末百姓に成

一 在選請御用留一(榴井書物)

享和二(戊午)御用留の正月元日の集(同(年寄)太兵衛初勤)の説明として、「一 弥平太病身に成伴太兵衛見習」とある。

これらを整理すると、大沢宿旅籠屋柏屋（大垣氏）の略系図は、概ね次のようになる。

①伝四郎—の安左衛門—②勢平太—③太兵衛

（弥平太襲名・水佳）

享保年間（一七一六—三五）、水佳の曾祖父伝四郎が旅籠屋柏屋を創業し、祖父の安左衛門の代には家業も衰退し御用宿（本陣付属の旅籠）なり、町年者も動ぬるまでとなった。

水佳は、この柏屋の四代目とみてよろしかろう。柏屋は、本陣井権右衛門屋敷の向かい（日光道中、柏屋に向かつて右側）にあった。

水佳の入業する俳書もまた多い。吾うまでもなく、越谷の主要俳人の一人に数えてよい人物である。

俳物編「俳諧新五百題」（文政二年序刊）

越谷に馬をしかるや橋のもと

水佳

鬼吉編「且事帖」（天保七年刊・宮代町史資料集・俳諧Ⅰ）

そこにある山もけふるや春の雨 同（大サハ）水佳

深斎編「題題俳諧今人登句集」（天保新編）

さざ波にかくるる日あり春の草 ムサン 水佳

他一句

鬼吉編「深川よとみ集」（弘化三年刊・前掲書「俳諧Ⅲ」）

此類にうごきもやらす花の雲 （大澤） 水佳

鬼吉編「嘉永四年歳旦集」（前掲書「俳諧Ⅰ」）

自然枯の敷うぐひす寒からん 大沢 水佳

逸淵編「霜花集」（嘉永二年序刊）

覗くほど枝の中なりうめの花

水佳

梅笠編「しをりと集」（安政五年刊）

君が代にはひする馬場の柳散

水佳

（南山）

南山については、「家 南山」とあるところから、大相模不動尊—真火山大霊寺の側ではないかと思われるが、今のところ何の手掛かりもない。

管中庵完来編「享和四甲子年歳旦」

初手水笑へば神も笑ふなり

武大サカミ南山

雪解て遠く成たる信濃山

「俳諧登句類聚」

臘月大きな人の通りけり

武蔵 南山

五、むすび

このように見ると、吾山以後の越谷俳諧史も、いかに豊やかなものであったか、お分かりいただけるであろう。宿場町「越谷」は、レベルの高い「文化的なまち」であったことが俳諧のジャンルからも証明されるのである。

今回は、「越谷市史」（逸史編・上）が取り上げている吾山をはじめ「大島藤太と登山俳句連」や「葛野家門と越谷」についても全く同様提起ができなかった。今日のテーマに加え、越谷市郷土研究会の各様に、是非さらなる詳しい解明を「期待申し上げる次第である。本当の研究は地元の方でないと困難なものである。

（参考文献）

一茶叢書第三編「隨齋筆記」（信濃教育會編・古今書院発行）昭和二年一月刊

「二茶自筆 化政期俳人句録」（勉誠社）昭和五十一年刊

「一茶全集」（信濃毎日新聞社）昭和五十一年—五十五年

「越谷市史」（第四巻）昭和四十七年三月刊

「越谷の歴史物語」（第一集—第三集）昭和五十三年八月—五十八年三月刊

「越谷風土記」平成十四年三月刊

「埼玉人物事典」平成十年二月刊